

基調講演

テーマ 「被災体験を活かしたまちづくり」



講師 神戸大学都市安全研究センター

教授 室崎益輝氏

プロフィール

昭和19年兵庫県生まれ。昭和42年京都大学工学部建築学科卒業、昭和44年同大学院工学研究科建築学専攻修了。京都大学工学部助手、神戸大学工学部助教授を経て、昭和62年より神戸大学工学部教授。現在は、神戸大学都市安全研究センター教授。この間、京都大学防災研究所客員教授、中央防災会議専門委員、地震調査推進本部専門委員等を歴任。著書に「地域計画と防火」、「建築防災・安全」など。日本火災学会賞、日本建築学会論文賞など受賞。専門は、都市および建築の防災計画

レジュメ

被災体験を活かしたまちづくり

まちづくりとは？

- 1) 「まち」は「街」でも「町」でもない
- 2) 「つくり」は「手作り」のつくり、「つくり酒屋」のつくり
*暮らしを語り、地域を誇ることのできる「わがまち」をつくろう

被災体験とは？

- 1) 記憶するものではなく、文化として承継すべきもの
- 2) 被災の克服をはかるための、財産であり原動力である
*被災体験を、安全なまちづくりの中にいかすことが大切である

被災から何を学ぶのか？

- 1) 地域社会の脆弱な体質を知る
- 2) 脆弱な体質を生み出した原因を知る
*いままでの都市計画その他のあり方を見直すことが大切である
*都市の体質そのものの改善をはかる公衆衛生的な取り組みをはかる

復興から何を学ぶのか？

- 1) 復興まちづくりから、新しいまちづくりの芽を見つける
- 2) 復興を被災体験から検証して、さらなる課題を明らかにする
*防災のためのまちづくりではなく、安心につながるまちづくりを
*「まちづくり力」をもった担い手の形成をしっかりとっていく

被災体験を生かしたまちづくりの課題

- 1) 自然環境との共生をはかる
- 2) 地域分化の創造発展をはかる
- 3) 社会の持続的な仕組みをつくる
- 4) 共考と共創のまちづくりを進める

皆さん、こんにちは。ただいま御紹介いただきました室崎でございます。(拍手)

今日お話しさせていただくテーマは、今も司会の方が言われましたように「被災体験を活かした防災まちづくり」ということでございます。私の緑色のレジюмеをお持ちだと、1枚めくっていただきますと、そこに私が書いたタイトルがございます。被災体験を活かしたまちづくり。どこか1カ所違っております。それはどこかという、いただいたテーマは防災というのが入っていたわけですが、私はあえて防災という言葉をごここでは使っていないわけでありませう。

なぜ使っていないのかというのも、きょうのお話をする一つの論点でございますので、まずは少しタイトルが違うぞということだけ気にとめていただければいいというふうに思います。

今日お話しすることは、そういたしますと、この私のレジюмеでいいますと、被災体験を活かしたまちづくりということでございます。話は3つに分けてございませう。1番目はまちづくり。まちづくりというのはどういうものかということをお話をさせていただきます。それから2つ目に、被災体験というのは一体何を意味するのか、あるいはどういう内容なのかという、被災体験についてお話をします。3つ目が、その真ん中をつないでいる言葉ですけど、活かした。体験を活かすというか、活かすということはどういうことかという、この3つのことをきょうはお話をさせていただきますというふうに思います。

まず、まちづくりの話でございます。これは多少釈迦に説法のところがございませうが、皆さんもよく御存じのことをあえてくどくどと説明するような部分がございますけれども、大学の先生というのは理屈っぽいというふうに思いながらお聞きいただけ

ればありがたいなと思っております。

まず、まちづくり、この話も2つ分かれてませう。まず、まち。まちがどうして平仮名なんだろうというところなんですね。少し米子市を通ってみますと、何か何とか街づくりというので、漢字の中華街の「街」、街路の「街」を使ったそういうものも目にしたわけでございますが、最近、この街路の「街」というのもあんまり使わなくなりました。それからもう一つは、もっと前はこういう言葉使ってたかという、町内会の「町」、長谷川町子の「町」ですね、「町」を使って町づくりというふうに使っていたんですけど、この「町」も使われなくなって、今は平仮名でございます。私のテーマはきょうの主催者の方からお送りいただいたんですけど、そのときには既に平仮名の「まち」になっておりました。これはひとつ時代を先取りしたというか、新しい時代では平仮名で書くのがひとつ我々の世界では常識になってるんですね。それはどうしてかということなんですけれども、レジюмеに書いてございませうように、街路の「街」でもないし、町内会の「町」でもない。街路の「街」と書くときというのはどういうことをいうかという、「街」というのは道路という意味ですね。道路と道路の横に建物が立ち並んでいるさまというのが、この街路の「街」という語源でございます。要は、これはハードなまちづくり、道路をつくったり、建物をつくったり、それから大規模な公園をつくったり、運河をつくったりダムをつくったり、そういう一つのハードな事業によってまちをくり上げていくことを、街路の「街」というのをいうんですね。

町内会の「町」は何かという、これはまさに町内会であります。コミュニティー。向こう三軒両隣、手を携えて一緒に仲よくやっていきましょうというときに、この町

づくりの「町」というのを使うんですね。

ところが、まちづくりとよくよく考えてみると、それは単に道路をつくったり公園をつくるというのがまちづくりかというのと、どうもそうではない。一方でいうと、じゃあ隣近所仲よくするのがまちづくりかという、そうでもない。それは一体としてそれが進んでいくというのか、両輪のごとく、ハードとソフト、そういう家をつくったり道路をつくるということと、その中のまちが元気になる、さまざまな仕事がわいてきて、みんな活力を持って生活ができる、暮らし向きがよくなる。それから、子供たちが伸び伸びと元気に育っていくというようなことを含めて、同時にそういうものがお互いに両輪のごとく進んでいくというのが、本来のまちづくり。となると、街路の「街」を使うわけにはいかないし、町内会の「町」を使うわけにもいかない。どちらにも共通しているのは平仮名の「まち」ということなので「まち」というのを使おうというのが、このまちづくりの「まち」と平仮名を使われる根底にあることであります。

ところで、阪神大震災で私どもが最も痛感したことというのは、まさにこのことなんです。要するに、どんなに立派な家ができても、その中で例えば地震の後でいうと、結構家族が離れ離れになるような状況がございします。これはいろんな経緯がございしますけれども、最悪の場合は離婚というようなこともございします。立派な家ができても、お年寄りがぼつんと高い高層住宅の一室に、鉄の扉を閉じたままじっと引きこもっているというような状況があちこちできてくる。じゃあこれは復興と言えるんだろうかというようなところが、一方であるわけです。

他方でいうと、家族が一生懸命力を合わせて頑張った。家族が全部力を合わせて、

何はなくともみんなが命も助かったし、家族もみんな元気でよかったよかったといながら、いつまでたっても自分の家がつくれない。そうすると、だんだんだんだん惨めになってきます。やっぱり家がなければ、一番つらい話は、遠いところに行っただけです。避難をしたけれども、地元に戻ってくることはできない。そういう場合は、ソフトな部分というか、家族のつながりというのはあったけれども、でも最終的にそれを暖かく包む家がなければどうにもならない。

要するに、阪神大震災で私たちが学んだことというのは、復興というのはそんなハードとソフト両方が満足して提供されるということが本当の意味の復興なんだ。まさにまちづくりの「まち」というのもそうなんです。今、阪神で、地元で我々が一番苦労してるのは、仕事が戻ってこない、暮らし向きがうまくいかない。不景気な時代ですから、すべて震災のせいではないですけれども、結局震災のダメージがさまざまな形で経済的な負担、あるいは会社が倒産したりとか、そういう羽目に遭って、結局震災前に比べて元気に生きていくことができないというようなことでございしますので、そういうこととあわせて申し上げると、やはりハードとソフト、家も大切だし、家の中の家庭の団らんも大切だと。両方ともしっかり考えていきますよ。どちらかだけを考え過ぎると、へんてこなまちができ上がってしまうということが、まちづくりの「まち」の話であります。

それから続いて、「つくり」の話。これは非常に簡単でございます。これはもう手づくりの「つくり」、あるいは造り酒屋の「つくり」というふうに考えていただいたらいいだろうと思うんですね。手づくりというのはどういうことかという、下からのという表現がいいのかどうかという

ようなことございますけれども、自分たちの周囲の環境は自分たちで参加をして、自分たちで決めて、責任を持ってつくっていきましょうよという意味合いが強いんですね。これは、なぜ、今このまちづくりというか、日本の都市計画の中でこの「つくり」という、市民が自分たちの周りの環境を自分たちでつくり上げていく。これは、防災でいうと、自分たちの命は自分たちで守るということですが、これも先ほどのハードとソフトの関係です。自分たちで守るといっても、これはソフトで幾ら助け合いができて、本当に守れないことがある。

ちょっと話が飛びますけど、御容赦ください。例えば阪神大震災の後で、市民の方、こう言われたわけです。阪神大震災の最大の教訓は、みんなで助け合ったことだと。助け合いというのが一番大切なことだと。だから、私たちは次に大きな地震が来て大きな火事が起きても、今度はバケツリレーでみんなを守るから大丈夫ですよ、先生、と言うんですね。その次に出てくるのは、だから大きな道路は要らないんです。この道路というのはちょっと問題かもしれません。本当は、大きな火事が起きたときに、緑と水の遮断帯というのがあって、火事をとめてくれるような仕組みがまちの中に、グリーンベルトがたくさんでき上がってて、燃えてくると、グリーンベルトのところで焼けどまるような、そういうものがまちの中に本当はないといけません。阪神のときは風が弱かったもんですからそんなに大事に至らなかったと言うと、また阪神の被災者に怒られるんですね。7,000棟も焼けたではないかと言われるんですけど、そのときの炎というのは、大体高さがせいぜい10メートルから20メートル。炎の幅も20メートルぐらいですかね。高さ10メートルも行かないぐらいの炎、それぐらいのガスストーブ

が押し寄せてきたというふうに考えていただいたらいいんですけど。ところが、風があった関東大震災では、火事が起きたときの炎というのは、高さが30メートル、幅が300メートルです。巨大なストーブが押し寄せてきますので、100メートル離れていても家がぼんぼんぼん燃えていくし、それから人がどんどん火傷で死んでいく。関東大震災のとき、被服廠というところで4万人の人が焼け死んだわけでありますから、これはたまたま神戸で風が吹かなかったので、これは助かったわけです。

要するに、そういう巨大な大きな炎が押し寄せてくるときに、じゃあ助け合いで、心で頑張ります、バケツで消せるかということ、それはとんでもないことです。やはり、それにはハードというか、しっかりとそれを防ぐ仕掛けがないといけないわけですから、要は、ハードもソフトもやはり行って初めて、道路だけで守れるかということ、またこれもいろんな問題があるということでございます。

それでは、まちをつくっていくときに、どういうまちをつくったら安全なのかという話に戻りたいと思うんですけども、もなかというお菓子があります。米子にもそういう、きっとおいしいもなかをおつくりのお店があると思いますけれども、おいしいもなかというのはどういうもなかかというふうに、皆さんちょっとイメージをしてください。おいしいもなかって、本当あんこがすごくいいんです。あんこがすごくよければ、もなかを包んでる皮は薄い方がいいですね。これは理想系です。あんこがよくて、それを包む皮が薄いのがいい。ところが、まずいもなか屋さんはどういう工夫をするかということですね。どうしてもいいあんこがつかれないと、まずいあんこだと、皮を厚いものにします。ぱりぱりとかたい皮にすると、皮をかりかりとか

んでる歯ざわりでごまかすことができ、あんのまずさをごまかすことができる。

今私たちが住んでいるまちというのを見たら、このまずいもなかによく似ているんですね。これはどういうことかという、一つのまちと考えると、あんこの部分というのは、大きな幹線街路に囲まれた、皆さんがお住まいになっている、路地があったり我が家の庭があったり、隣と隣との家が軒と軒がぶつかっているような身近な部分というのを、これをあんこといいます。それを包んでいる、先ほど大きな幹線街路と言いましたけれども、そういう幹線道路だとか大きな公園だとかそういう、米子でいうと駅前の方の通りとかなんとかという通りがありますが、そういう通りの部分が皮の部分ですね。皮の部分というのは、これは上からの防災計画というか、行政が責任を持ってやります。あんこの部分は、ある部分はそこに住んでる人が、例えばブロック塀を生け垣に変えたりとか、路地裏にちっちゃな前栽の木を植えて、少し心の安らぎを得るような空間をつくるか、あるいは自分の前の庭に夕方には水を打って、きれいに掃除をするという形で、住んでる人があんこの部分は手を入れていきます。あんこの部分になかなか行政というのは手を入れることができない。だから、仕方なくというのが、このあたりがちょっと微妙ですけども、行政はあんこの部分には手をつけられないので、どうしても幹線街路というような形のところに税金を使って、巨大な施設をつくっていくという形になる。そういう形でずっと日本は来ましたので、いつまでたってもあんこの部分がよくなりません。

いや、鳥取県は豊かな自然に囲まれているので、木造密集市街地はたくさんないと言われるかもしれませんが、先ほど御紹介のあった倉吉なんかを見ると、やっぱり

りあんこの部分が弱いわけです。もう老朽化して、今にも倒れそうなど言って、また怒られてしまいますけど、そういう住宅が密集をしているようなところがある。

今までの防災というのは、だからそこはそのままにして、街路とか道路とか、そういうものをつくっていただく。だけど、阪神大震災というのが起きて何がわかったかという、あんこの部分が悪い、というのは、壊れやすい木造住宅が密集している状況が、手がつかないままに放置されてきていたわけです。そこに一旦火がついてしまうと、まち中が全部火の海になってしまうし、それから老朽化した家屋が全部倒壊をして、下敷きになって人が死んでしまうという部分になってます。

そうではなくて、やっぱり少し身の回りのところをよくしていこう。そのよくしていこうというときには、やっぱりそこに住んでいる人がしっかりそれに取り組んでいくとか参画していくとか、主人公になるということがないと、その身の回りの環境はよくなりません。今まで、ややもすると、みんながみんなそうではないですけども、かなりの人は何でもかんでもお上に任せればいい、自分は自分の家の中のことだけをしていいというふうに思っていたところがあるんですけども、そうではないですね。公共というのは、自分の家の前の路地から始まって、みんながかかわり合いを持つ、近くにある商店街だとか市場だとか雑貨屋さんだとか、あるいは小さな工場だとか、そういうところを含んだまち全体を全体の公共だと。その公共というのをみんなに変えていく、つくり変えていくという取り組みがないと、本当の意味での安全なまちができない。

だから、単に流行語ですね、下からのとか市民主体のとかという、言葉じりではなくて、市民自身が自分たちのまちに責任を

持たなければいけない。先ほど私の申し上げようとしたのは、市民が市民の命を守る、自分の地域は自分で守るということは、よく皆さんおわかりになっている。それは自分のまちは自分たちでつくることが安全と非常に密接な関係にあることです。自分たちのまちを自分たちでつくる努力をしてこなかったのが、自分たちのまちは自分たちで守れなかったんだ。自分たちのまちを自分たちで守ろうとすれば、自分たちのまちは自分たちでつくらないといけないということが、この「つくり」という意味の持っている意味合いです。

自分たちでつくるのであれば、自分たちの気持ちとか志というのはどんどん反映していこう。造り酒屋の「つくり」になってきます。おいしい酒はどこの地域にもあります。米子にもあるし、倉吉にもあるし、鳥取にもあります。それぞれ違った味を出す。日本一律のそういうお酒ではなくて、それぞれの地域の志と気持ちを込めているんなものをつくっていくように、まちというのは、倉吉は倉吉のよさがある、米子は米子のよさがあるという形で、いろんな個性を持ったまちをつくっていかないといけない。

けさもちょっと米子のまちを、加茂川というところの蔵とお寺の寺町を拝見してきました。一生懸命頑張って残そうとされている気持ちはあるんですけども、いつまでこの川沿いのきれいな景色は残っているんだろうか。ここがやっぱり「つくり」のところですよ。志というのは、地域の文化というのをどうやってまちに反映させるか。それは、そこに住んでる人たちがしっかりそのことを意識をして、提案をし、まちの中に込めていかないといけない。

ちょっと長くなりましたけど、まちづくりというのは、そういう意味で考えると、非常に深い意味があるように思いま

す。それは皆さん方よく御存じだと思いますけれども、だから単に何となくまちづくりと言えればいいんだろうということではなくて、これからの新しい時代は、そういう形で自分たちのまちは自分たちでつくるとい形で取り組んでいかなければならないというのが、1つ目のまちづくりというところの話でございます。

二つ目、今度は話ががらっと変わります。被災体験とは一体何だろうかということですね。被災体験とはこれも別に講釈をする必要はございませんけれど、大きな災害に被災をする、被災をしたことが体験だろうと思うんですけど、でもそれは単に被災をしたという事実ではなくて、その事実を通じて感じたり考えたりしたことというのは、すごく大事ですよ。やっぱりそこで何を感じて何を考えたか。その考え方も表面的にさっと何となく考えたのか、じっくり考えたのか。私の意見は、被災をしたという、あるいは家族を亡くしたり、それから財産をなくしたり、非常につらい目に遭ったときに、やっぱりそこはそことしてじっくり、どうしてそんな目に遭ったんだろうかということを経験してじっくり考えるところからスタートしないといけないというふうに思いますけれども、とにかく、被災体験を伝えようとかというわけですね。もう2年もたてば忘れてしまうんじゃないかというような話が出てまいる。この辺が一つのポイントであります。

だけど、僕は、体験というのは必死に覚えるものではないと思います。今の情報化時代というか、毎日毎日新しいニュースが入ってきます。ニューヨークのテロの話が来るし、北朝鮮の拉致の話があるし、次から次から新しい情報が入ってきますと、頭の中の記憶力というのも限界があります。もう2年前の鳥取県西部地震の話だとか、さらにその5年前の兵庫県南部地震のこと

なんてのも、片隅の片隅の片隅に行ってしまう。記憶というのは、忘れ去られるものでありますから、あえてそれを必死に、風化させずになんていって、僕は覚える必要はないんだろうというふうに思うんですね。

じゃあ忘れてしまっていていいのかというと、実はそうではなくて、ここに書いていますのは、被災体験というのはどうして伝えることができるかということ、それは文化にする。文化というのは、簡単に言うと、頭で覚えるのではなくて、体で覚えてしまう。体の一部になってしまえば、それはごく自然と将来に伝わっていく。

具体的にどんなことを申し上げているかというと、例えばです、これはもう私の非常に夢みたいな話です。東京から来た友人がいろいろ私の前でおべんちゃらかもわかりませんが、その友人が、地震直後に来たとき、神戸の喫茶店のウエートレスさんはきれいだし、優しい、あの優しさは何だろうか。東京ではあんな優しさはないよと、こう言うんですね。すかさず僕は、いや、それは震災で、人を大切にとか、みんなが助け合うということを学んだ。特に、若い人たちはお年寄りを大切にしないといけないということを震災で初めて学んだんだ。だからみんな優しくなったんですよ。その友人がつい1カ月ほど前にまたやってきて、彼がまた同じようなこと、また別なことを言うんですね。阪急電車というか、電車に乗ってたら、若い女子高校生がお年寄りに席を譲った。あれは関東ではないよと言うんですね。僕もそれもまた、いや、それも震災体験です。震災体験が文化になって、若者がお年寄りを大切にすることを覚えたんですよ。お年寄りは大切にしなければならないということを教えるのではなくて、席を譲るとか、お年寄りに声をかけるとか、あるいは人に優しくする

とか人の気持ちを理解しようと努めるとい、そういう生き方というものが、多分あと50年ほどたっても、日本中の何かいろんな本に、神戸の人というのはすごく優しい地域で、心優しい人が住んでる地域であるとかということがきっと書かれるときが来る。そもそもそれはどうしてかということ、いや、50年前に阪神淡路大震災というのがあってねという話になる。これはちょっと夢見たいな話ですね。本当に続くのかなとか、半信半疑でいながら、なるべくこれは文化として育ててほしいと思う。

それと同じようなことが被災地にはたくさんあります。例えば、被災地の人は今、水というものをすごく大切にします。お風呂には必ず水を張って、それからトイレの水を流すときにはできるだけ、たくさんのお水を使わないで、大事に大事に水を使おうとする。いろんなところに、家の前の雨水おけみたいなところに水をためておく。当然飲料水を含め水というものを大切にしている。

それから、今、復興まちづくりということで、いろんなところでまちづくりやりますけど、せせらぎの水路を、神戸のまちの中へせせらぎの水を流そう。かなり、これ今一部でき上がっています。神戸の少し、会下山という山のある、ふもとのところに、一つの復興まちづくりを行って、そこにきれいなせせらぎの水路ができました。それから、芦屋という少しお金持ちが住んでいるまちがありますけど、そこもきれいな今ビオトープで植生が生えた水路ができます。そういう形であちこちに、神戸というのはもともと水のないまちです。これはちょうどローマというのが、行くとテレビの泉なんてあるでしょう。ローマというのはもともと水のないまちだった。あれは紀元前100年から紀元後の64年の間、ローマというのは3年に1回ぐらい火事で

焼けていく経験をします。アウグスティヌスという皇帝が、これではだめだ、やっぱり水が要するというので、水道橋をずっと引っ張ってきて、あっちこっちにトレビの泉とかいうのを消防水利としてつくったのが始まりですね。でも、その辺のことを皆さん方は御存知がない。実はあれは、だから僕らから言わせると、2,000年前にねという話になってきますね。ローマに大きな火事があった。そのときに水というのが大切だということを学んだんだ。そのためにトレビの泉とかそういうものを、まちの中に水という一つの仕組みをつくった。

今、神戸でやろうというか、根づきつつあることは、今まちの中に水をしっかり組み込んで、水とともに生きていく一つの姿をつくっていきこう。そういうことはきっともう何年間もすれば、何でふるに水をためてるのかよくわかんない。もう神戸の人はみんな何か神経質に水をためるなという話になるのかもしれないけれども、それが一つの生き方としてというか、文化として育てていけば、それで十分なわけです。その中にもっと自然との共生を図るとか、お年寄りが大切とか、いろんな文化が育っていく。それがやはり体験を、これはむしろ活かしたという話につながるのかもわかりませんが、被災体験というのは、だから無理やり記憶することではなくて、しっかり文化として継承していくことである。

そういうことでいうと、私も関係してるんですけど、立派な博物館をつくることだけがきっとそういう被災体験を継承するということでは多分ないだろうというふうに思います。簡単に言うと、被災体験というのはどうやって生活の中に生活の一部にしていきこうとするのかということを考えないといけない。だから被災体験は文化にする対象であるというのが1つです。

2つ目は、これがもっと大切なことであ

ります。被災体験で一体何を伝えるのかということ、少しこれは考えていただいた方がいいと思います。これは例えば神戸でも人と防災未来センターという博物館的な資料館的な施設ができ上がりましたが、一体ああいうものを通じて何を伝えようとするのかということと関係するんですね。私は、4つのものを伝えないといけないというふうに思っています。

1つは、自然というものの優しさと厳しさです。厳しさだけではないです。阪神のときでも、ちっちゃな樹木によって命を救われた人がたくさんいます。ちっちゃな河川の水で家を守った人もたくさんいます。自然というのはそういう優しさを持っているけど、同時に大きな地震を引き起こす、大きな火山の爆発を起こすだけの、極めて大きな破壊力とを持っているということですね。まずそのことは知らないといけない。

2つ目に知らないといけないのは、今度は、被災後の人々の助け合う人間のすばらしさというものがあります。大きなダメージを受けたからといって、人間は要するに、そのために消沈して何もできない存在ではなくて、必ずそういう復興という形で人間はそこから立ち上がっていただけの力というものを持っているし、その中で助け合うということ、これを学んだという意味での、すばらしい人間の資質というものがある。人間のすばらしさというものを確認するというのが2つ目であります。

それから3つ目に何を学ぶかという、このあたりからが重要でございまして、もっと伝えないといけないのは、被災というか、災害に遭って家族を失うということがどんなにつらく悲しいことかということですね。広島ピースセンターのすばらしいところというのは、やっぱり原爆というか、あるいは戦争というものの悲惨さというのを非常に見事に伝えることができる施

設になっているからであります。我々は、だからそういう震災の悲しさ、つらさ、悲惨さというものを伝えないといけない。何年も仮設住宅に入って、それで将来の展望もないままに悶々と過ごしたときのつらさというようなものというのは、多分筆舌に尽くすことができない。でも、それは伝えないといけないわけですし、そういう意味でいうと、いかに災害というのは人々にとってつらいものかということをお伝えしないといけない。これは3つ目です。

4つ目は、これが最後に一番難しいかもわかりません。これはちょっと後の話と関係するんですけども、なぜそんなことになったのか、その原因をお伝えしないといけない。どうして阪神淡路大震災で6,400人もの人たちが亡くなったのかという原因を正しく伝えるということが必要であります。

この3つ目と4つ目の問題というのが、次の新しい社会、新しいまちをつくる上で、極めて重要なことでもあります。いかにつらいかということは、二度とあんなつらい目に遭いたくない、そこからスタートしないといけないですね。そのために何ができるのかということをおしっかり考えておかないと、ついついそれをすっかり忘れてしまうと、もとのもくあみというか、もともと同じような危険なまちをつくってしまうおそれがあるわけです。あるいは安全なまちというか、安全なまちよりは、やっぱりもう少し格好よくておもしろくて、何か金もうけになるようなまちをつくりたいというふうに思われてしまうかもしれません。私が申し上げてるのは、つらさというのが安全へのばねになっていくということなんです。

ちょっとこれも話が脱線します。これはむしろ皆さん方に言うべきことではなくて、ひょっとしたら東京だとか名古屋の人

に言わないといけないんですけど、今、我々が考えないといけないことは、やっぱり次の大きな災害に対してどう備えるかということでもあります。今、東海地震だとか南海地震というのは、もうすぐ、今そこに来て、今年はないそうですけれども、いつ起きても不思議ではない状況に置かれているわけですね。そういうときに、2つの意見があったとします。立派な美術館をつくりたい。それからもう一方では、小学校の耐震補強をしたい。予算がないし、どっちにお金を使うのか。下手すると、大抵の場合は美術館の方をつくりたい。地震はいつ来るかもわからないのになんかということになるんですけども、美術館なんていうのは、大きな地震が来て、しばらく地震が来ないという見通しができてからおつくりになった方がいい。今つくっても、次の地震が来たら壊れてしまうかもしれない。だけど、一方で、小学校の耐震補強は、今急がないといけないわけなんです。小学校が壊れると、子供たちは亡くなってしまいます。あるいは、壊れてしまうと避難所として使うこともできないわけなんです。それがもう秒読みの段階で、少なくとも、例えば南海地震という地震について言うと、50年後に80%です。もうほとんど50年以内に来るとことを言ってるわけですね。そうすると、1年に1校ずつかけて、50年で小学校全部補強しますというテンポでは間に合わない。1年に10校とか20校とか、もう3年ぐらいですべての小学校は地震で壊れない補強をしないとイケない。どっちにお金を使うかというときに、あんなつらい目をしたくないという気持ちがあると、やっぱり小学校をきちっと補強しましょう。両方ともやるのがいいんですけどね、本当は。でも美術館はちょっとあきらめましょうよ、というふうな考え方になるわけです。やっぱりあのつらさとか悲惨さとか、広島のピース

センターは何を言ってるかという、ああいうケロイド状の写真を見せることによって、二度と戦争はしたくない、二度と原爆というのは使ってはいけないということになってくるわけでありませう。

そういう意味で、もっともつらさとか悲惨さというのをしっかり伝えないといけないんですが、これはどうやって伝えるのかというのはなかなか難しいんですけども、伝えることでそれが復興のばねになるし、新しいまちづくりのばねになるんだということ。端的に言うと、まちづくりをするときに安全というのは決して忘れてはいけませんよということでありませう。

それから、2つ目の問題というか、さっき言った4番目の問題、原因の問題であります。どうして6,000人も人が亡くなったのか。これはしっかり考えないといけない問題でして、さらっと頭をよぎると、あれは古い家が壊れたんだとか、もうちょっと構造的に考えてる人は、いや、あれは屋根が重かったから倒れたんだとかね、それからあるいは、いや、日本の伝統的な建築が悪いんだとか、大体そういう話で今世の中はおさまっています。だからツーバイフォーのアメリカかカナダ式の住宅をつくらうなんていう、神戸なんかではこれが今はやりになっているわけですけど、本当にそうだったんだろうかということを考えていけないですね。

どうしてだったんだろうか。これはいっぱい問題がある。一番大きいことは、これは多分鳥取の人には当てはまらないことなんですけど、一つ一番大きなことは、住まいの手入れをすることを都会の人は忘れていたわけなんです。昔から大掃除というのは必ずあって、大体6月の水無月のはらいと12月の年末に大掃除をする。まち中がこぞって同じように大掃除をして、手入れをして、床下に潜って、腐ってないかどうか、し

けてないかどうか、どこか柱で傷んでいるところはないだろうかということで、大工さんを選んで修理をするということ。小まめに修理をして、100年どころか200年、300年ということで住まいを大切に使っていく文化だったんですが、だんだんそれは使い捨て文化というものに慣れ親しんできますと、どうせ家は買い替えればいいんだ。だからふすまの表替えとか、障子の張り替えぐらいはしてると思いますが、人によっては障子の張り替えたこともない。それから、当然床下に潜って土台が腐ってるかどうかなんて見たことがないという人がほとんどです。阪神大震災で壊れた家の大半は全部シロアリに食われているか、土台が腐っていたわけです。要は、だから一番問題は、シロアリがはびこったとか腐ったとか、要は家の手入れをしていなかったのが結果としては壊れたというふうに考えないと。これは例外はないです。手入れのしてない家はほとんど壊れています。だけど、古い家でも、築100年というか明治時代に建てた家でも、しっかり手入れをしている家は絶対壊れていないわけですね。だから、問題なのは、やっぱり手入れをしていなかったことが一番大きな問題でしょうし、それで要するに下敷きになって亡くなったということですから、そういう手入れの問題がそこに問われているというふうにも思います。

それから、家具が倒れてみんな亡くなったわけですね。どうして家具が倒れて亡くなったのかというか、それはよくよく考えてみると、私の子供の部屋でもそうだけど、6畳一間に、どういうわけかモニターというか、テレビが2台ある、カセットデッキがある、何とかのもの、もうありとあらゆる、6畳一間に20何個の家具というか電化製品というかが詰め込まれています。これは親が悪いと思うんですね。大量消費文

化にぞっこんまいてしまっ。みんなが
たくさん物を買って、地域経済というか日
本の経済が豊かになった部分もあるので、
今日もひょっとしたら家具屋さんとか電気
屋さんがおられるかもしれないので、家具
を買えと言ってるわけじゃないですよ。家
具を安全にきちっと使いこなしていくとい
うことが必要だと思うんですけど、家の中
のそういう整理整頓だとか、物のそういう
積み方とか住まい方とか、そういう作法み
たいなものがうまくできてなかった。

そういう話からずっと行くと、例えばま
ちを見てみると、今までの河川を埋め立て
てしまったり、たくさんあった緑を壊して
そこに家を建ててしまったりとか、いろん
なことをやってきた。どんどんどんどん遠
距離通勤みたいにして、1時間も2時間も
かけて通勤通学するようなまちをつくって
しまっています。そのことは、結局、例え
ば地域のコミュニティというか、さっき
の暮らしと仕事と住まいが一体になったと
いうことでいうと、大都会になればなるほ
ど2時間通勤なんか平気になるんですね。
すると、ねぐら族です。もう朝早く起きて
会社に行って、真夜中に帰ってきて寝て、
通っていく。土曜、日曜も接待だとかとい
ってゴルフに出ていってたら、まさに地域と
切り離された人がいっぱいできてしまう。
そういう、非常に地域と切り離されたそう
いう社会のシステムみたいなものが地域を
弱くしていくということになるんですね。
そのことによって、直後には地域の助け合
いがうまくいかなかったとか、いろんな問
題が出てまいるわけですね。

そういう意味では、だから原因というの
は、何か現象面だけじゃなくて、どうして
そういうことが起きたのか、その中に、私
が言うのは、やっぱり人間の愚かさみたい
なものが大きな災害を招いた背景にある。
やっぱりその愚かさというか、我々の過ち

とか愚かさというのをしっかり考えないと
いけない。これは重要なことですね。日本
人というのは、何か愚かさとか原因を追及
するということは、何か犯人探しをして、
市長さんが悪いんだとか知事さんが悪いん
だと言ってしまうえばスカッとする。それは
本当の原因究明じゃないんです。それは、
人を血祭りに上げることではないんです。
それはだれしも過ちを犯します。だから、
それはどこに至らなかったのかという、ど
こに思いが足りなかったのかということ、
だからまちのつくり方のところで、本当
にこういうまちのつくり方をしているんだ
ろうか、車ばっかきに依存したようなまち
をつくっていいんだろうかとか、いろ
んなことを、ここには自動車屋さんもいる
かもしれないんですけど、ともかくそうい
うことを含めて、本当にそれでいいのかど
うかということをしっかり考えていかないと、
うまくいかないということになってくる
わけですね。

少しそういうことでいうと、私のレジュ
メの中に、被災から何を学ぶのかという中
に、公衆衛生的なことを考えましょうとい
うことを少し書いてございます。結構これ
が重要ですね。災害の備えというのは、こ
れは医学のことを考えていただくと4つ
あるんですね。1つは予防医学。予防医学
というのは、これは風邪で例えますと、風
邪を引かないように予防注射をしておく
とか、それから人込みの中に出て帰ってき
たらうがいをするというんですね。これは
すごく大切なことです。地震でいうと、ぼ
ろぼろになっている家を修理をして、手入
れをして、大切に家を使っていくというよ
うな、そういう習慣をつくるとか、あるい
は少なくとも家具が転倒してしまうと家具
の下敷きになるので、そういうことになら
ないようにしっかりやりましょうというの
が、きっと予防医学です。これがまちづく

りになっていくと、まちの中にやっぱり水がきれいに流れて、水がうまくだまっている、いろんなところに水が少しある。それから、緑が豊かにあるというようなことです。そういうようなゆとりのあるまちをつくっておけば、地震が起きても火事が広がらないということになってまいりますから、そういうふうにしていくというのが予防医学。

その次が緊急治療です。これは、そういっても地震が来て、家が壊れることもあるし、火事が起きることもある。火事が起きると、消さないといけないということですね、水が要る。これはだから、病気でいうと風邪薬を準備しておくということに等しいんですが、これが地震対策とか都市計画でいうと、耐震貯水槽とか防火の貯水槽をきちっとしとくとか、皆さん方の家でいうと、お風呂に水を張っておくとか、非常持ち出し袋を用意しとくとか、できればリヤカーとか電動ジャッキとか、もういろんなものをちゃんとあらかじめ用意をしておいて、いざというときに備えるというのが緊急治療。

それから3つ目がリハビリ。リハビリというのは、それでもやっぱり家を失う。失ったら、早く自分の家が建てかえることができるような仕組みをつくるというのが、リハビリ的な対応です。これは、基本的に言うところ、大きくはもう2つですね、リハビリのポイントは。一つはお金です。お金さえあれば家を建てかえることができます。じゃあ貧乏人はどうするのかという話になって、きょうは片山さんが来られてるのでおべっかを使う意味ではないですけど、ちゃんとそういうために、住宅再建の支援のための制度なりシステムをきちっとつくっておいて、不可抗力というか、一生懸命努力したけれども家が壊れてしまった人に対して、きちっと住宅再建ができる、リハビリ

ができるように、しっかり必要なお金も渡してサポートするという仕組みがないと、これはうまくいかない。これが1つですね、リハビリの。

2つ目のリハビリは、心というつながりというか、気持ちが滅入ったのをどうやって、心のケアというか、実はこれは人のつながりです。いろんな人がいろんな意味で励ましたり手を出したり、やっていくことによって人間は立ち上がります。人のつながりをどうつくるかということが重要です。だから、リハビリはもうお金とつながりという、ちょっと非常に簡単に言い過ぎですけど、でもこれはすごく大切なことですね。阪神大震災というのは5年も6年も、今8年目になろうとしていますけど、まだ自分の家を建てかえることができていない人がたくさんいます。そういう意味でいうと、こんな長期にわたる苦しみを味あわせるといことは、これはとんでもないということになりますから、まさにケアということにはしっかりしないといけない。そこまでが常識ですね。

4番目に言おうとしているのが、ここでいうと公衆衛生的なという言葉になってまいります。これが僕は一番大切。これは、風邪でいうと公衆衛生って何かというと、暴飲暴食をしない。それから、睡眠時間をしっかりとるとか、それからストレスをためないとかですね。ストレスって結構厄介で、これが一番重要です。ストレスをためないというようなことなどが健康管理ですね。このストレスをためないとか暴飲暴食をしないというのは、風邪だけじゃなくて一応腹痛にも役に立ったり心臓病にも役に立ったりするから、いろんな意味でいいわけですね。だからストレスをためないようにするということが重要になってきて、そうすると、それは地震対策でいうと何かというと、これが例えばコミュニティーを

しっかりしておくとか、家族の関係をしっかりつくっておくとか、あるいはもう少し言うと、ここの後の方にもちょっとまちづくり力と書いてありますけれども、防災意識というか防災知識というんですかね、ちょっと知識の話をしましょう。あんまり時間がないので、たくさん例を申し上げることができないんですけど。

日本人というのは、生きるための知識というか知恵というのを、ずっと江戸時代から明治の前半ぐらいまではしっかり持ってたんですけど、どこか今忘れてしまっているんですね。皆さん方の袋に入っているこのパンフレットもそうなんですけど、パンフレットあけたらハウツー物なんです。これ受験の参考書と一緒にですね。グラツときたら机の下とかね、グラツときたら火の始末とかね、書いてあるんです。何で火の始末をしなければならぬか。僕は都会の人に言うんですよ、ちょっと僕、鳥取県でマイコンメーターなんかの普及率がわかりませんので、マイコンメーターが普及しているところでは、地震が起きて震度5以上になったら、ほぼ100%、マイコンメーターがガスを消してくれます。にもかかわらず、どうしてもみんな元栓を消しに行くのか。阪神大震災では2階に寝ている奥さんに地震がグラツときます。グラツときた、火の始末というふうに丸暗記で教え込まれてますので、ダダダッとおりていって、下に降りたときにドオンと家が壊れて、2階の天井がドンと落ちて下敷きになって亡くなりました。これは消しに行ったかどうかかわからないです。類推です。御主人が、揺れが起きたときは隣にいたと。それから奥さんがわからなくなった。奥さんは台所の炊事場の中で下敷きになった。これはきっと御主人はこれはガスを消しに行ったんだろうと言われてるんですね。だから、物すごい揺れのときは、2階にいたら絶対下に降

りてはいけないし、ガスなんか消しに行かなくてもいいんです。だけど、パンフレットを見たら、ガスは消しに行けと書いてあるんですね。

それから、机の下に潜れ。阪神大震災で机の下に潜って亡くなった人はたくさんいます。なぜかという、あの机は、台所の机なんていうのは、上から震度5か6ぐらいで電球が落ちてくるとか物が落ちてくる時に頭に当たったら危険だから机の下に潜りましょうです。だけど、上から家が壊れてこんな大きな、何十キロもするはりが落ちてきて、ほんと机を真っ二つにするようなときに机の下に潜るということは、かえってそれは自殺行為です。そんなのはちょっと考えたらわかります。こんな激しい揺れだったら家が壊れると。こんなやわい机で大丈夫かと考えたら、壊れるの決まってるんです。だけど、そんな当たり前のことがみんなわからない。なぜかという、パンフレットで、ぐらっときたら机の下。学校の先生が、はい、机の下に潜りましょう。潜っていいときと悪いところがあるんですね。

もっと言うと、皆さん方、もし今度地震があったら、皆さん方、家の中にいますか。家から外に出ますか。それだってもうみんな答えられなくなってます、日本人は。今までは家の中にいる。いろと云うから阪神のときはみんな家の中にいたんです。家が壊れてみんな下敷きになったわけです。じゃあ逃げろというので出たらどうなるかという、ブロック塀が倒れてくる、ガラスの雨が降ってくる。じゃあどうしたらいいんだろうか。そういうこともきちっと知識として、知恵というか、そういうものがきちっと継承されていない。その背後に、活断層って何かね、そういうことはよくわからない。聞いたこともないとか。そういう意味では、地球とか自然というも

のを全く知らない。全く知らないと言うとちょっと言い過ぎですけど、やっぱり余り自然とのかかわりでそういうものを見てきていなかったわけです。

私は何を言おうとしたか、もう最後のことなんですけど、公衆衛生というのは、もっと自然というものと人間は常に仲よくつき合っていないといけないし、自然と触れ合っていないといけないし、自然と一緒に過ごす機会、自然といろいろなコミュニケーションをするような場というようなものをもっともっと体験をしていかないと、自然というものがわからないし、理解できない。だから、地震というもの、火山というもの、そういうものは全く理解できない。ちょっとした情報に恐れおののいたり、あるいは非常にそれを無視してしまって、地震など来るはずがないじゃないかというふうに思い込んでしまったりするという人間の弱さがそこに出てきているわけですから、公衆衛生というのはいろんな意味で、そういう日ごろの生き方というところまで考えていかないといけないというのが、公衆衛生的な取り組みではすごく大切ですよということだろうというふうに思うんですね。

もう時間があと10分ですので、もう3番目の話しますね。今少し、被災体験というのは何か、あるいは被災体験から一体何を学ぶのか。今度、学んだことを形にしていこうというのが、まちづくりで活かしていくということになってまいります。ここで2つのお話をしたいと思います、活かすということ。

1つは、一番最初に申し上げた、なぜ防災ということを書いていないのかということでありまして、それは、防災のためだけでまちづくりというのはあるんじゃないということなんです。防災のためということだけで考えると、何か建物は全部鉄筋コンク

リートのコンクリートジャングルにして、もう巨大な道路だらけのまちにして、何かそういう無味乾燥な、1,000年に1回起きるか起きないかの地震のために、非常に重装備の、何かそういう息苦しいようなまちをつくるということになってしまう。だからみんな防災まちづくりなんて嫌だ。もう防災防災と言うなというんですね。

防災というのは、隠し味です。表に出たら絶対いけないですね。スーパーマンという、昔映画、これはちょっと年がわかりませんが、今ごろの若い人はスーパーマンがわからなくて、パーマンの方がいいとかというんですけど、僕はパーマンってあんまりよくわからないんですけど。何を言ってるかということ、ふだんは新聞記者ケントで、日常の世界の中にしっかりなじんでいる。社会の一員としてそれなりの責任を果たしているけれども、一たび大きな災害があると、スーパーマンに変身をして、人々を助けに行くという。そういうまちがいいわけです。だからそれは、普段はお年寄りが編み物をする、ひなたぼっこをする、ちっちゃなポケットパークであったり、それから、我が家の猫ちゃんが隣のみいちゃんとデートをするようなちっちゃな庭があったりとか、そういうふうにして、非常に楽しく使われていて、結果としてそれが地震のときには人々の命を助けてくれるものにしていくということなので、防災防災という、防災まちづくり防災まちづくりということではない。

そういう意味でいうと、やっぱりアメニティーがあってコミュニティがあるという表現は難しいんですけど、文化があって、それから自然があって、人々の心、触れ合いのコミュニティがあって、本当にいいまちをつくるということが、結果としてそれは防災まちづくりになります。だから、隠し味ですから、隠し味入れるの忘れ

たら困るので、常に防災とか安全とか、そういうことは少し頭に入れながら、でも本当にいいまちをつくる、誇り得るいいまちをつくるということが、本当の基本的には防災。いいまちというのは、いいまちで元気なまちと言った方がいいですね。元気で、金もうけはしないでもいいけど暮らしていける、豊かに暮らしていける、そういうまちをつくるというのが基本的にはまちづくりです。そういうまちをつくれれば、結果として防災はついてきます。余り防災防災と言って、巨大なというか頑丈なまちをつくらうというふうにする必要は多分ない。家族は楽しく住める。だけど土台は基礎はしっかりつくられるということが必要かもしれないけれども、そういう意味では、防災というのはあえて省いてるんですね。

だから、もっと言うと、いや、これからはもう、むしろ地震もあるけど、もっと怖いのは地球環境の問題があります。人類がいつまでいられるのかよくわかんない。恐竜みたいにもうあとこの1世紀で人類は滅びるかもわからない瀬戸際に来ているときに、もっと環境ということを考えないといけない。それから、少し残念なことだけど、戦争の危険性。戦争とか、これからテロ、それから犯罪。今、全国で放火犯罪は急増しています。あるいは幼児の虐待だとかそういうものがどんどん起きてくるときに、防犯対策もしないと。地震対策、防犯対策、火災対策もしないといけない。あるいはバイオテロの対策もしないといけない。コンピューターセキュリティーの対策も。あれやこれや考えてたら、もう頭が狂ってしまいます。

でも、共通して言えることは、そういうものの一つの、やはり先ほどの公衆衛生というのは、風邪薬にも腹痛にも効くというようなことを申し上げましたけど、そういう意味としては、コミュニティというか、

その地域社会と家族の関係とか、家族の関係でもっとわかりやすく言うと、きょうは杉山さんも来てるので、いや、そんなことはないよと言われるんですけど、震災の後で震災離婚ってちょっと増えたんですという話があって、みんな理由は地震のせいになります。あれは例えばうちの父ちゃんは大阪の会社に行って1週間も帰ってこないとか、隣の父ちゃんは会社を休んで毎日バケツに水上げて、これ大変なんですね。5階のマンションまで水を何週間も上げる。それを見ていて、うちの父ちゃんとは違って離婚をしたとかね。もっとひどいのは、地震が起きたら父ちゃんが先に出て、みんな家族をほったらかして逃げた。あんな冷たい父ちゃんとは、みんな離婚されるわけですけど、でもそれはよくよく考えたら、それは地震のせいじゃなくて、その前からやっぱり夫婦仲が悪かったんです。奥さんは離婚のタイミングをねらってる。本当に仲よければ、震災のときに力を合わせて復興するわけですね。公衆衛生というのは、家族関係とか人間関係とか会社の関係とか、そういうところへ全部かかわってきます。そういうものがやっぱりきちっとできているのかどうかということが、すごく大切なことだというふうに思っているわけがあります。

そういうことで、最後の話になります。活かすというのは、だからそういう意味でいうと、むしろ日常の問題として考えていく。だから、1つ目として活かすという話は、防災防災と言わないで、もっと広く考えていって、本当にいいまちをつくる、いい家庭をつくる、いい社会をつくるという延長線上で安全のことは考えましょうということですよ。

それから、2つ目、鳥取の人にぜひ聞いてほしいことがあります。活かすというのはどういうことか。これは一番最初の記憶

をするということとも少し関係をします。今までは復興ということがすごく大切な課題で、やはり2年前の地震を常に頭に描きながら、まちづくりだとかいろんなことで努力をしてきます。だんだん復興というか、もとに戻るといふか、そういう目途がついてきます。ついで先に一体何があるんだろうかということなんですね。それはもうそれでおしまいじゃないということも申し上げてるんです。おしまいじゃなくて、やはり今まで、要するに被災で感じて考えたこと、それから、この2年間いろんな思いで努力をしたこと、考えたこと、感じたことというのを、次のまちづくり、もっといいまちにワンステップする、次のもう一歩進めるためのまちづくりがここでつながっていかないと、今までの2年間の鳥取のまちづくりは、僕はにせものだったというふうに思うんですね。だから、これからなんだということも申し上げたいわけです。2年間は2年間ですごく努力されて、本当にいい、立派なまちを再建されたと思うんですけれども、よりいいまちを目指してというのは、それは震災を受けた場合と受けなかった場合と、受けたからこそこんないいまちになったという、活かしたというのは、むしろ日常に、次のステップに、どうやって次の目標を定めていくかということに、非常に重要な意味を僕は持っているように思っております。

最後です。最後は4つのキーワードというか、キャッチフレーズしか書いてございません。自然環境との共生を図る。これはもう先ほどから少し、ちらちらと言ってますのでおわかり願えるかと思えます。私は一番大きな、やっぱり21世紀に入って最大の課題というのは、もう一度人間というのは自然というものに対して謙虚になって、自然というものをもっと理解をしないといけないし、特に、地球が今もうあえい

でいるというか、地球自身があえいでいる時代の中で、やっぱりどういふ生き方をしていくのか。そういう場合には、車一つきょうは乗るべきかどうかといふか。さっきの下からのという中には、防災とか地球環境問題というのは、その多くは、例えば大きな力を持ったアメリカなどの国がそれなりの努力といふか、本来の努力をするということも当然必要ですけど、一面でいうと、一人一人の人間がささやかな努力を積み上げていかない限りは、これは絶対に解決しない問題であります。

そういう意味でいうと、下からのというのは、まさにそういうところも地球環境問題、シンク・グローバリーですね、地球規模で物事を考えて。次にアクト・ローカリーというのは、現場で行動しましょうといふのは、今度は一人一人の問題として考えていきましょうということも提示をしているわけです。自然環境とはすごく重要なテーマです。

2つ目は、これも地域文化もちらちらと言いました。米子は米子としてもっとすばらしいまちになっていく。そのことが、他の地域の人たちにも非常にいい刺激を与えていくし、それから、米子と既にそういう関係だと思うんですが、松江が競い合っ共々それぞれのいい個性を磨いていくような、そういう一つの仕組みをつくっていかないといけない。

文化というのは、育つと安全になります。これも表現が悪いんですけど、僕は子供ができたとき、かわいらしかったもんですから、外国に行くときはちゃんと保険を自分に掛けて行くんですね。ところが、憎らしい奥さんと結婚していると、奥さんの方に保険を掛けたりするということをやっちゃうわけですね。だから、何を言ってるかといふと、いいまちをつくと、いいまちを守ろうとする気持ちになる。その気持ちが、

いわゆる防災力という、防災というものにつながっていくわけです。ごみごみしても汚いまちに住んでたら、掃除もしない。掃除もしないと放火のターゲットになって火災が頻発するということになってまいりますから、基本的に言うと、いいまちというのは文化があるまち、個性があるまちということになりますから、そういうものをしっかりつくり上げていく。

それから3つ目が、この持続的な仕組みってなかなか難しいんですね。今は少子・高齢化で人口が減るなんていうことは一番難しい困難な問題ですけど、極めて深刻な問題です。そういうことを含めて、例えば人口規模、子供、若者、年寄りがバランスよく構成をして、お互いに助け合う。それは一つの人口構成の持続化です。それから、暮らしというか、ビジネスというか、仕事、産業、お金が地域の中でうまく回ってって、その地域の経済というのは、外から何か大企業を誘致してカンフル剤を打たなくても、地域の力で地域の経済がうまく回っていくような、一つの持続的な仕組みをつくる。だから、持続というのは、単に地球環境問題じゃなくて、そういう文化から経済から人口の構成から、そういうものが循環性を持っている、連続性を持っている、そういう一つのまちというのをつくっていくかないといけない。

だから、いろんなものでカンフル剤を入れるということが本当にいいのかという、かつて大規模工業団地を誘致したわけですけど、今、多くの企業はあえいで、どんどん撤退をしていく。やっぱりその余波というのは、非常に大きな問題になっていますけど、やっぱり地域自身が内発的に、自分たちの力で直していく。これはもう病気でもそうです。外科手術で患部を取り除くということではなくて、漢方医学のように、体全体をよくしていくような仕組みが多分

21世紀は要求されていく。ここでいう持続的な仕組みというイメージは、漢方医薬のようなものというふうにイメージをしていただいたらいいんだろうというふうに思います。

最後です。最後は、共考と共創のまちづくりを進める。これは、一緒に考えて一緒につくり出していこうということですね。協働という言葉も今はやりなんですね。コラボレーションというんですね。協力の「協」と働く、一緒に働きましょうという、それも大切なことですけど、やっぱりみんなと一緒に考えましょう。時間がちょっと、もう一、二分超過しますけどお許してください。パートナーシップというのには4つの条件が要るんです。1つはコミュニケーションです。コミュニケーションというのは、みんなで意思を伝え合う。これは地震なんかの問題もあるんですね。専門家と市民のコミュニケーションができていないので、本当に地震が来るのかどうか、地震というのはどんなものかというのは、なかなか一般の人はよくわからない。わからないままにいくということはよくないわけで、そこをどうやってコミュニケーション、一緒に考えるような仕組みを、これははやり言葉で言うと情報共有とか情報公開という話です。そういうシステムがないとうまくいかない。

それから2つ目がコーディネーションという言葉です。ボランティア・コーディネーターという言葉は盛んに使われる。コーディネーターというのは、紫色のセーターにピンクのズボンをはく。紫とピンクがコーディネートされて、それ以上の効果をあらわす。これはお互いを尊重し合うということ。お互いを尊重し合って、お互いのいいところを認め合って、いいところを出し合ってうまくつながっていくというのがコーディネーションという。そういう関

係がこういうまちづくりでは必要であり
ます。

3番目がコオペレーション。コオペ
レーションというのはコープの、生協のコー
プですね。一緒に運営をする、一緒に意見
を出し合って運営をしていく。運営という
のは、みんなで運営をして意思決定をして
いくというのを、コオペレーションという
んですね。

それから4番目がコラボレーションで、
一緒に汗を流す。これは協働、一緒に働く。
おれは口を出す人、おまえは働く人とい
うのはよくなくて、みんなで汗を流す。

そういう4つのことをしっかりやった
ときに初めて、まちづくりで、例えば行政
と市民の連携とか、市民と市民の連携と
かということができ上がっていく。そし
て市民がやっぱり下からのというか、
つくり酒屋をつくっていくときに、
やっぱり周りの人、他の人たちの考
え方をきちっと尊重して、これは口
では簡単に言えるわけですけども、
そういう一つの新しいつながりのシ
ステムというか、市民参画のシステ
ムというものをしっかりつくり上げ
ていかないといけないというふう
に思っています。

阪神大震災で私が私個人として学んだ
ことは、この4つのことなんですね。人
と人のつながりとか、自然とのつな
がりとか、文化というのを大切にし
ないといけないとか、それから、少
し地域の内発的な力、地域社会の
力を強くしないといけない。そう
しないと、次の大規模な地震には
戦えないというふうに思ったわけ
です。そのために、やはりいい社
会をつくるために努力をするとい
うのが、とどのつまり、震災体験
を活かしたまちづくりではないだ
ろうかというふうに思っております。

ちょっと舌足らずのところだとか、
おわかりにくいところがあったか
もしれませんが、阪神大震災の経
験というのは、

きつと鳥取西部地震を体験した人
には御理解いただけるものと思
って、お話をいたしました。もし
おわかりにならなかったらと
したら、私の講演能力がないと
いうことでございます。御清聴
どうもありがとうございました。
(拍手)

おにっ子太鼓演奏

鳥取県溝口町立溝口小学校児童

山中志織、砂原伶香、篠田龍太郎、深田 遥、入澤有加、矢田貝南子

高橋紗織、神村 大、権代恵梨香、川上博子、神村 海、入澤聰斗、篠田詩織
(敬称略)



おにっ子太鼓は、溝口町鬼面太鼓振興会の子ども連として、平成13年に小学生の有志により結成されました。

現在は、小学2年生から5年生までの総勢13名が、鬼面太鼓振興会会員の指導のもと、夢フェスタとっとりの「わらべ際」での演奏を目標に一生懸命練習にがんばっています。

演奏曲目は、「おにっ子太鼓」です。この曲は、「あそび」「おにっこ」「おまつり」の3楽章からなり、いずれも元気のいいオハヤシ調の楽しい曲です。

